ヒカルの碁に変人がやってきた。

焼売

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヒカルの碁の世界に、(酒が入ったら)手のつけられない痴女がやって来た。その影響がどう出るのか!!

これは幽霊と心優しい青年と、痴女のお話。

注意!!りゅうおうのおしごと!とのクロスオーバーです。

名作揃いのヒカルの碁ＳＳに多分喧嘩を売りに行く事になると思います。

駄文で尚且つ規制の方もやばいかもしれませんが何卒よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

目　次

第一話　プロローグ ―― 1
設定少しと第２話 ―― 5
第３話　秀策　対　秀埋 ―― 10
第４話　ラムレーズン ―― 16

第一話　プロローグ

「おち●ぽおおおお!!お●んぽっぽおおおおお!!!」

正気を疑うような絶叫が轟く。

「銀子!銀子はどこだ!!ぎんこぉぉ!!私だ秀埋だぁぁ!!お●んぽおおおおー!!」

絶叫の主は本因坊秀埋。

囲碁の7大タイトルの一つを初めて獲得した女性。

将棋で言えば「名人」にも匹敵する「本因坊」を獲得した正真正銘の大天才なのだ。

本名は別にあるが、タイトル獲得後は慣例に則って本因坊　秀埋の雅号をなのり、たわわな胸とその名から「シューマイ先生」と呼ばれている。

その大先生は同じ女性であり、競技こそ違うが、分厚い壁に挑む空銀子という女子中学生を特別に目をかけている。そのため、度々銀子のいる将棋会館に足を運ぶが、

「おちん●おおおお!おち●ぽおおおお!!」

その性格は（酒が入ったら）破天荒。

というより、痴女である。

しかも、酒好きである為大体酔っている。囲碁の棋戦にも酔ったまま出場し、おち●ぽお●んぽ言いながら対局したこともある程だ。

まあ、一つ言える事は棋士は頭おかしくても強ければ(だいたい)許される。その中で言えばお●んぽは許されたのだろう。

「せ、先生!私はここに……」

「おお!銀子!いたか銀子!てっきりどこかでおち●ぽしてるかとおもったぞ!!」

「し、してませんよ!そんな事!!」

「何を言っている!今日は奨励会の対局日なのだろう!若くて未来あるバッキバキのおち●ぽを上と下のお口に咥えるのだろう!」

最早完全な痴女。その対応に追われる銀子は最早涙目である。

「やめてください!そんな事言っていたら削除依頼が来ます!!」

「何を言っている！そんなメタ発言をしていたら嫌われるぞ！そうだ！嫌われないようにおち●ぽして許してもらえ!!」
「だからー!!!!私はおち●ぽしないですー!!」
清楚でウブな女子中学生からも「おちん●」と言わせる秀埋の実力…恐るべし。
「なにぃ!?おち●ぽしてないだとぉ!?」
しかし、それを聞いて喜ぶ男性の奨励会員などは居ても、秀埋は激怒する！
「処女膜も破れなくて才能の壁を破れるか!!銀子おまえはなぁ、そうやって目の前に美味そうなおち●ぽが我慢汁垂らして待っているのに咥えられないから、いつまでたってもプロという壁を破らないんだ！」
「いいか、銀子!!必要なのは強靭な努力！女というのは男より弱い！けど、それを補うための努力！そして…」
「そして…？」
珍しくマトモなことを言っていると思った銀子は聞く。
「強靭なおちん●が必要なんだよおおおお!!」
「さあ、銀子!!初めは怖いかもしれないが！一緒におち●ぽしよう！そう言えば八一はどこだ！お前の才能の壁は八一に破ってもらうのがいいだろう!!」
これはやばい。周りの人間は誰かこいつを止めてくれ！とアイコンタクトを交わし合う。しかし、誰もがこの痴女に対し、強く出れない。
そんな中、救いがらやってきた。
「ハァハァハァ…シューマイ先生はこちらに来ていると聞いてきたので、回収しにきました!!」
「ぬぅ！女鹿!!そうだ！お主も一緒におち…グヘェ」
回収に来たのは棋院の職員である女鹿。
慣れた手つきで首を（死なない程度に）絞め、落とす。
「それでは失礼しましたー!!」
嵐のような一時はまた、嵐のように過ぎ去った。

女鹿に回収された痴女は自宅に投げ込まれた。
目を覚ました痴女は家にある酒を取り敢えず飲み、おちん●と叫びながら寝た。
しかし！普段から酒好きなのに、今日に限って実はインフルエンザにかかっていたのだ！もちろん、おちん●状態のシューマイ先生はテンションマックス。自身の不調に気付かず、飲みまくり、寝た。そして…
「おちん●ぉぉぉ…オエェ…」
本因坊　秀埋　　死因　　寝●ロが喉に詰まった事による窒息死

しかし、これを見ていた囲碁の神様が居た。
その神様は彼女が居なくなっては全ての平行世界における囲碁界への損失は多大なるものと考え、寝ゲ■が喉に詰まり、死ぬ直前に平行世界に移転させる事に成功した。

バシン！
「ンッ！ハァハァハァ。ハァン!!」
「起きなさい！」
バシン！バッシーーン!!
「ハァン!!キャアッ!!愛がないよ女鹿ちゃん…」
「女鹿ちゃん？貴女まだ寝ぼけているようね…??」
「ふぇ？」
「ほら、朝ご飯食べて学校行きなさい。今日から新しい小学校転校よ？初登校が遅刻なんて笑えないわ。」
「え…？」

周埋はよくもわからず首をかしげる。ふと目に付いたテレビを見たら…

『塔矢　行洋名人防衛成功!!これより、塔矢名人のインタビュー映像をご覧下さい!!』

設定少しと第２話

簡潔に設定を。
特段見る必要はないです。
シューマイ先生はヒカルの碁の世界に逆行転移した。
時期は進藤（佐為）が塔矢きゅん１回目の撃破の直後位。小６の秋位のつもり。
場所は関西ではなく関東。
天辻一族が東京に支店を開いたという設定。シューマイ先生一家がそれの責任者となった。
本来小学校６年生になった途端に引っ越す予定であったが、諸所の問題（人は御都合主義ともいう）により、何故か小６の秋という中途半端な時期の転校となった。

それでは第２話。よろしくお願いします。

―――

「ここはどこ…？」
本因坊秀埋。本名、天辻　埋は狼狽えていた。
昨日までとは全く違う姿。しかし、この姿は幼い頃の自分にそっくり。
そして、朝にす●たん（関西ローカルの朝の情報番組）がやってない事からここは少なくとも関西ではない。
そして、塔矢　行洋という名も知らない碁のプロ。
全く状況が掴めない。
（すま●んはうちの家族、特に父の影響で毎日見ていた。しかし、今父様がテレビで見ているのはＺ●Ｐ。確かに関西地方でもＺＩ●は流れる。１０チャンネルの朝の番組は●ＩＰとすまた●のリレーのはずだ。そして、少なくともこの時間帯は関西ローカルですま●んが流

れるはずだ。という事はここはおそらく関西ではない。けど、父が褌姿であることから父は盤師だと思う…日本刀や天辻碁盤店の資料もあったし。それに塔矢　行洋。テレビの中で一瞬盤面が映ったがまず並みの棋士ではないことはすぐわかる。だが彼を私は知らない。そして…）

自分がわからない状況にいても常に冷静な自己分析を繰り返す。

碁の大天才は訳のわからない状況でも、冷静にわかる情報から整理していく事が出来る。

そして、彼女の出した結論は…

「取り敢えず1週間くらい過ごしてみよう。多分なんかわかる。」

行き当たりばったり感が凄い。

ただ、自身の状況が掴めない中、無理に結論を出すのは悪手と判断したのだ。

そして、幼い頃の日常を思い出しつつ朝ご飯の席につく。

（……確か、ちっちゃい頃はソーセージの皮の油が好きで、ペロペロ舐めるように食べていたっけ…）

はむ、くちゅくちゅ、じるるりゅ♡　ブチュッ♡ブリュリュリュッ♡ビュッ!!

「きゃっ!中の（油が）いっぱい飛んじゃった…」

こんな事をしながらパンやハムエッグなどを普通に食べる

（後は確か…バナナとミルクアイスをデザートによく食べてたかな…）

基本、棋士の記憶力は半端ない。幼い頃の行動も思い出そうとしたら思い出せる。

埋は家のテーブルの上からバナナを冷凍庫から棒付きのミルクアイスを取り出す。

「あーん。このバナナ長い～反ってる～☒」

訳のわからない中にいても食欲だけはある埋。大きいバナナを選んだようだ。

「あ！バナナゆっくり食べてたらアイス溶けそうになってる！」
じゅううくちゅくちゅ、ちゅうっ…れろれろれろれろれろ
こんな時でもマイペースに行動できるシューマイ先生。只者ではない。
「こらっ！埋！もうすぐ登校よ！ランドセルは母さん出しとくから早く食べ終わりなさい！転校初日はお母さんもついていくんだからね！」
そして、この映像を見ても何も言わない母も母である。
そして、無事にミルクアイスも食べ終えた埋は母が用意したランドセルを背負い、母と一緒に登校する。
「それじゃあお父さん、イッてきまーす!!」
「おう！イッてらっしゃい!!」
「ほら埋さっさとイクわよ。」
「はぁい」
何処と無く字が違う気がしないでもないが、変人集団の棋士達と付き合う盤師達もまた少しオカシイのであろう。

途中親娘して道に迷子になるという事案発生。
しかし、様子を見ていた藤崎あかりという女の子が気づき助けてくれた。
「ごめんね。藤崎さん（主にうちの母のせいで）迷惑かけて。」
（　）内の言葉を言う勇気は埋には無い。
「いいよいいよー！これでも6年生ですから！」
「私も同じ6年生なのに…」
「ああっ！でも仕方ないよ初めての人にとってこの道ややこしいし…」
「あらあらフォローもできるなんて本当うちの娘とは大違いだわ。おまけに可愛いしうちのお転婆娘と交換して欲しいわ…」
「ええっ！そんなっ！交換なんて……」
「ふふふ。冗談よ。こんなでもうちの一人娘なんだから。」
「そうですよねっ！ビックリしましたよ！」

精神年齢２０代後半とリアル年齢３０前後（本当は４０手前…だなんて言えない）の二人はあかりをからかいつつ案内してもらう。
「はい！ここが学校です!!職員室はこっちですからついてきてください！」
こんな感じで無事に小学校、職員室へ。
担任の先生と適当に面談を済ませた後、教室へと向かう。配属されるクラスは６年１組らしい。
「はい、今日は転校生がやって来ます。後半年もしないうちに卒業ですが、仲良くしてあげてくださいね。それでは天辻さん入ってくれる？」
担任の先生から促され、埋は素直に教室へと入る。埋の母親は参観しても良かったのだが、家の整理の目処がまだついていないのを理由に帰宅している。
母「ヤバイわ。道に迷った…」

「はい、男子の皆さん良かったですね。可愛い女の子ですよ?それでは天辻さん自己紹介の方お願いします！」
男子はバカなため、可愛い女子が来ると喜ぶ。特にこのクラスではトップクラスの可愛さを誇る藤崎あかりがヒカルの嫁認定されているため、相対的に他のクラスより可愛くてフリーな子が一人減るのだ。
最近の子はませている。
「えーと、天辻　埋です。好きなものはおさｋ…お刺身と父の仕事の影響で将棋盤や碁盤を作ったり、指したりするのが好きです。個人的には将棋より碁の方が得意です。半年間よろしくお願いします。」
小学生女児で好きなものがお酒だなんて言えない。
幸いにして、周りは噛んだものだと思ってくれているようだ。
そして、それ以上に将棋や碁などと古臭い物を嗜んでいる事に驚く。
「天辻さんは緊張しているのかな?半年間も過ごすのですからもっとリラックスして大丈夫ですからね。それでは、あそこが天辻さんの席

ですから着席してくださいね！」

こんな感じで無事（？）に1日目は過ぎていく。

犬の幽霊「ヒカル！あの女の子も囲碁を指すそうですよ！早くやってもらいましょう!!」

ち…淑女の母「東京という都会にこんな鬱蒼とした森があったかしら？」

第３話　秀策　対　秀埋

授業が終わり、金髪の混じった感じの何処か中性的な少年が声をかけてきた。
「天辻さん…だっけ？碁打つんだよね？俺も碁やってるから一緒に打たない？」
埋自身碁が好きなのは今も昔も変わらない。そして、碁を好きな子を好きな事もだ。
「もちろんいいわよ。あ、でも私の家まだ引っ越したばかりで散らかっているから、進藤くんの家でやらせてもらっていいかな？」
「あ、ウチの家碁盤が…そ、そう！修理中で今ないから、碁会所行こうぜ！丁度いいところ知ってんだ！席料は俺出すし。」
「そう。それならそこに案内してくれる？」
後、これから碁盤関連の事は天辻碁盤店をご贔屓に。」
ちゃっかり宣伝も欠かさない。
「ああ、わかったわかった。（本当は碁盤すら持ってないなんて言えねー）あれ？そういえば俺って天辻さんに自己紹介したっけ？すぐに進藤って出てたけど。」
「えーと、それは担任の先生が顔写真付きの名簿を休み時間に見せてくれたから……金髪の子ってなかなかいないから印象が強かったのよ。」
「それは納得。」

ｉｎ碁会所
「ここが進藤くんの通ってる所？」
「ああ、っていっても一回しか来た事ないけど…」
「ふーん。席料はいくら？やっぱり奢ってもらうのは悪いから自分の分は自分で払うよ。」
「５００円だけど…こっちが誘った側だからせめて半分位は払わせてくれよ。」

「進藤くんって意外と紳士的なのね。甘えさせてもらうわ。」
「意外ってなんだよ意外って！」
　二人は夫婦漫才的なことをしつつ、入室する。
「「こんにちはー（ういーす）」」
　受け付けの綺麗なおねーさんに二人分合わせて千円を払ったが…
　それ以上に周りがざわついていた。
「おい、あの子……」
「そうだ、あの時の」
「あ……あの子がアキラくんにかった？」
「進藤くん……この騒ぎって一体何したの？」
「さ、さあ……？」
「まあ、いいわ。奥の方空いてる席あるし早く指しましょう。」
「お、おう。（塔矢いなくてよかったー!!）」
（ヒカル！早く指しましょう!!）
「それじゃあ黒はあげるから。私これでも強いから覚悟しててね？」
　埋は、さすがに同年齢で、かつ今は自分がプロではない状況で石を置け。というのは言えない。もちろん、進藤ヒカルのプライド傷つけないように指導碁っぽくさすつもりであった。
（私に黒を与える…？舐められたものですね！指導碁をしつつきっちり半目差で勝ってやりましょう！　メラメラメラ）
（いや、お前の姿見えねーし。相手も舐めてるつもりはないって……）
　パチ……パチ……パチ……パチ　……
（進藤くん石の置き方すらおぼつかないのに。なんでこんなに強いの!?それに、この手。これは最良の手ではない…でも、私もある状況なら絶対に打つであろう手。もしかして、進藤くんも…？）
（ヒカル。この少女とてつもなく強いです。それにおそらく……彼女の指し回しも指導碁そのものです。彼女自身も私の事を舐めてはいたでしょうが、それ以上に舐めていたのは私のようですね。）
（前にやった塔矢とどっちが強い？）
（彼もまた、将来が楽しみな子供ではあります。しかし、彼女は既に虎か、あるいは龍か。遥か高みに居ます。）

（そんなになのか…）
　対局の途中、突然埋が声を掛ける。
「ねえ、進藤くん。この対局辞めにしない？初めから『本気』でやり直しましょう？」
「えっ!?」
（ささささ佐為…どうする!?）
（もちろん指し直しましょう。次は私も本気を出します!!メラメラメラ）
「お、おういいぜ。」
「手番はどうする？黒をこのままあげてもいいし、交代してもいい。」
「なら一応は公平に交代するか。（いいよな佐為？）（ええ、構いません。彼女と打てるならそれで…）」
　天才同士の対局が始まった。
　パチ……パチ……パチ……パチ　……

（（やはり、さっきとは別物……彼（彼女は）ただ者ではない!!））
（進藤くん。碁の型はかなり古い。過去のものは常に最先端のものよりも劣る。そのはずなのに、なんで有利に立てないの!?）
（っく、彼女の指し手、未だ私が経験したことのない手もちらほら見受けられます……感じる。感じますよ。彼女と突き詰めて碁を打てば最良の一手。神の一手に近付けると。既に死して霊体となった身。自らの手で彼女と打つことが出来ないのは心残りですが、それでも再び機会を与えてくれた神に感謝を。）
（……すげぇ。佐為も天辻さんも……かっこいい。盤が光ったように見える…）
（ヒカル。理解できなくても構いません。でも、見ていてください。彼女程の強者と戦えた事の感謝を最大限に込めて打ちますから。）
　佐為は一度目を深く閉じ、そして、もう一度見開く。
（行きますよ!!）
　パチ……パチ……パチ……パチ　……
　佐為と埋の対局。

方や江戸時代の天才、本因坊秀策。
方や平行世界の天才、本因坊秀埋
本来、出会うはずのなかった二人の天才の対局はまさに佳境を迎えていた。
そして、ここに、もう一人の天才となりうる少年がやってきた。
「こんにちはー。ってあれはし…しんど！（対局している…？）」
塔矢　アキラ　　紛う事なき天才少年である。
アキラは、二人の天才を挟んだ盤を覗き込む。
（これは…これは……!!）
パチ……パチ……パチ……パチ　……
（僕のいる世界とは別次元だ……）
パチ……パチ……パチ……パチ　……
（二人とも、互角の勝負…なのか？女の子の方が凄く苦しげな顔をしているけど、進藤は余裕な表情をしている。もしかして、この盤面は進藤の有利？）
そんな事はない。一応互角ではある。
（おかしい、進藤くんから何も感じられない。ポーカーフェイスにしても度が過ぎている。全く表情を変えずにこうも淡々とさされると…自信がなくなっちゃう…）
ヒカルは実際なにも考えていないため、読めなくても仕方がない面はある。
しかし、佐為はそうではないのだ。
（っく、ここでこう来ますか……だが、これで…何!?ここか！そうか、そこにそうされると返す手が…いや、ここに光が！）
埋とアキラは勘違いしている為仕方ないが、佐為もまた、苦しげな表情をしている。だが、霊体なためそれが見えないのだ。
バチ！
（なによこの手!?っく…ここでこうされると…）
パチ……パチ……パチ……パチ　……
（差を作られてしまった…ここに来てこれ以上の挽回の見込みもない。）

「ありません……」
声を振り絞ったのは埋の方だった。
秀埋　対　秀策
初対局の結果は秀策に傾いた。
（え!?何?）
（中押しです。彼女は自分の負けを宣言したのです。）
（えっ!?えっ!?ちょちょっと…オ…オレよくわかんないけど…だって前の対局のようにまだ盤に打てそうな場所いっぱいあるんだぜ!?
さ…佐為…お前そんなにコテンパンにやっつけたわけ!?）
（いいえ、まだ続けようと思えば続けられます。けれど彼女の敗勢は変わらないでしょう。勿論、彼女が挽回できる可能性もまだ十分にあります。けれど、彼女はその選択をしなかった。私としてもまだ打ちたい気持ちはありますが、それ以上に彼女の意思を尊重するべきです…）
（そ、そうなのか…）
「天辻さん……」
返事はない
（聞こえないんだ…天辻さんとそして、佐為のいる世界と俺のいる世界は違うんだな…）
「天辻さん…俺、帰るね?用事思い出したからさ。帰り道わからなくなったら6時くらいにもう一度ここ来るからその時まで待ってくれたら迎えに来るよ」
ヒカルは逃げたかった。真剣な二人から。けれども憧れもした。真剣な二人に。

（ここをこうすれば、こうこうこうでこう?かな）
（ここもまだ、こうした方が…）
（完敗ね。前の世界では最強の一角だったけど、この世界じゃ小学6年生とどっこいどっこいか。でも、私はここから、ここでもプロを、タイトルを目指す!!）
二人の天才の対局の結果。秀埋の方はさらなる決心を固め、より努

力をする。この世界でもタイトルを掴むのはそう遠くはないだろう。
（あれ？進藤くんは？）
棋士の集中力は半端ない。声をかけられた事すら彼女は感じていなかっただけであった。

（おとうさん　おとうさん…）

「おとうさん。ボク囲碁の才能あるかなぁ？」
「囲碁が強い才能か？
ハハハそれがおまえにあるかどうか私にはわからんが…」
「そんな才能なくってもおまえはもっと凄い才能を二つもっている。」
「ひとつは……そして、もうひとつは……」

（僕は今までお父さんの言葉を誇りに真っ直ぐ歩いてきた。でも今大きな壁を進藤と、そして彼女に感じたんだ。感じてしまったんだ。）

（みえない大きな力べが……）

第４話　ラムレーズン

「ふぁ～～～んん、ネムネム…」

埋は先日行われた天才同士の対局を連日に渡って一人で検討していた。もちろん、普段は学校に行っている埋が検討できる時間はあまり無い。従って、徹夜での検討となり、自然と普段の学校において、その弊害が出てきているのだ。

「眠たいけど…碁も勉強も頑張らないと。前世(？)では何気に大学に行かなかったのちょっと後悔してるし……」

しかし、小学６年生の体において、連日の徹夜は体に毒なようで、

「むにゅーん…」

授業中にも関わらず独特な寝息をたてながら寝てしまっていた。

「こら！天辻さん！起きなさい！そして、この歴史の問題を解いてください！」

「むうぅ……えーと、徳川…」

大学に行かなかったとはいえ、所詮小学校の問題。酔っていない天辻　埋にとって、簡単である。

「正解です。けれど、寝ないようにしてくださいね。」

しかし、寝る。

そして、時間は流れて……

「天辻さん、天辻さん、起きて。放課後だよ？」

「むにゅう…？藤崎さん…？」

「あ、やっとおきた！もう放課後だよ！早く帰ろう？」

「そうだねぇ…起こしてくれてありがと。スヤァ…」

「もう……ヒカルは勝手に帰っちゃったし、天辻さんはまた寝ちゃったし、なんでこう、私のご近所さんって自由奔放な人が多いのかな。プンスカプンスカ」

あえていうなら（将来）棋士だから。

「天辻さん！ほら、早く起きて！私の家に来たらアイス食べさせてあげるよ！」

「アイシュ？食べるー!!早く行こ！」

棋士の反応は早い。プロ棋士とは甘い物に目がない。甘いものは単純に脳の餌である。しかし、どうせ糖分補給するなら美味しいものがいいのだ。

かの棋士は糖分補給の際は板チョコをバリボリするだけでいいらしいが、拘る人はメロンのみしか受け付けないなどという贅沢な人もいる。

「ここまで早くに反応するなんて…まさか狙ってんじゃないでしょうね…？」

ｉｎあかり宅

「ただいまー（お邪魔しまーす）」

「あ、うちの家今は親居ないから気楽にしてていいよ！」

「はぁい。」

「それから、はいここ！冷凍庫！好きなの選んでいいよ！」

ジャンジャカジャーンと独特の音を口ずさみながらあかりは冷凍庫の扉を開ける。

「ありがとー。ぬ？まさか、これは…バーゲンダッシ？」

埋が目につけたのは、バーゲンダッシという超高級アイスクリーム。コンビニ等では１つ６００円近く、格安スーパーでも４００円代前半に行けばいい方と言われている高級品。普通のアイスは１つ１００円程度と、普通のアイスの５倍前後以上するにも関わらず、上品な甘さと口溶けで、富裕層からは大人気のアイスなのである！

「そうだよー。うちの叔父さんがそこの工場に勤めてて、よくくれるんだー。」

「バーゲンダッシたべていいの…？」

「もちろん！あ、でもラムレーズン味しかないかな…？チョコは私が、抹茶はお姉ちゃんがよく食べるし…お母さんとお父さんは甘いもの自体が苦手で、ラムレーズン味ばかり残るんだ……」

「それでもいい！あのバーゲンダッシが食べれるなら！」

バーゲンダッシは値段の性質上、一般家庭において、なかなか食べられるものではないのである。

「んー、天辻さんがそれでいいならいっか。私はこのモナカの女王で

いっかなー。」
　モナカの女王とは、一個１５０円と少しお高めであるが、クリーミーな口溶けから大人気の商品である。最も、バーゲンダッシよりは価格も品質も落ちるが。

「いただきまーす!!」
　そして、天辻　埋という酒乱はバーゲンダッシ　ラムレーズン味を口にしてしまった。

「ムフフ…」
　埋の様子が変わる。
「あれ?天辻さんどうしたの?」
「ヌへへ～。埋って呼んで～私もあかりって呼ぶから～。ムフフ。それにしてもあかりってい感じに育ってるよねぇ。」
　埋はあかりの胸に手を伸ばす。
「ふえええ!?急にどうしたの!?てんつ…埋ちゃん!?」
　こんな時でも言われたことを守ろうとする藤崎あかりである。
「急にどうしたも何も～?あかりのお●ぱいを堪能している進藤が羨ましい?って感じかなーモミモミ」
「そんなこと!!してない!!!アッ♡　ンンッ♡　やめて♡！」
「何だって!?ヒカルとBまでまだ行ってないって!?モミモミ」
「Bって何なの!?Bって！　ヒャアッ♡　クル♡きちゃう♡」
「Bは…Bだよ！ABCのB！こうやって、異性とおっ●いを揉み揉みしたり、下のお口をいじいじすること！」
「そんな破廉恥なことしません！ンン♡」
「でも、本心ではして貰いたいって思っているだろう…正直に言ってご覧なさい?ヒカルのおち●ぽでメチャクチャにしてほしいって！女の子のアレは来ているんでしょう!?ほら、今もこうして、私にやられてるじゃん?」
「そんな…ンンンンンッッッ。ちょっと埋ちゃん変だよ!?アッ！」
「変ではない！これが普通なのだぁ…いい反の……スヤァ…」

「ふぇっ!?埋ちゃん!?急に今度はどうしたの!?」
「スヤァ…」
「寝てる…?何で?はっ!とりあえず、埋さんの家に電話しなきゃ!!」
酔った人はいつ寝るかわからないのだ。

プルルルルル
「はい、もしもしー。天辻碁盤店でございますー。」
「あ、あの!天辻　埋さんのお母さんですか!?」
「は、はい。そうですが…」
「あの!埋ちゃんがちょっとおかしいんです!アイス食べた瞬間…その…エッチな言葉を連発して、そして寝ちゃったんです!!」
「ああ…もしかしてアイスにお酒かなんか入ってるかな?」
「は、はい!ラムレーズン味ですから!」
「あの子ね…お酒に酔うと豹変するのよ。大変だったわね。初めて見てビックリしたでしょ?引き取りに向かうから待っててくれる?」
「は、はい!」

「むにゃぁ…おち●ぽ…お●んぽ…ヌへへおっ●いもいいのぉ…」
「あの、大人しそうな埋ちゃんが……」
「でも、ちょっと……あれだったな…もし、これがヒカルにやられてたら…ひょっとしたら……///」
そして、あかりは悶々としながらひたすらに埋の母親を待つ。
そして、救いのベルはなる。
ピンポーンピンポーン
「埋ちゃんのお母さんだ!」
ガチャッ
「こんにちは!」
予想通り埋の母親であった。
「はい、こんにちは。埋は何処にいるかな?」
「あ、今は私の部屋に居ます!こっちです!」
「はぁい。」

あかりは埋の母親を部屋に案内する。
「一応聞いとくけどあかりちゃんは何か埋にされなかったかい？この子本当に見境なくなるから……」
「ふぇっ!?だだだ大丈夫です!!」
「そうかい？ならいいんだけど…」
部屋に案内された母親は埋を担ぎ上げ、それじゃ失礼するよ。と出ていった。

後話
ｉｎ何処かの碁盤店
パチン！パチン！と大きな音が響く。
「ヒャアッ！キャッ！痛い～!!けど辞めないで～♡」
「この！馬鹿女！私がどれだけ恥をかいたと思っている!!」
「はいっ♡しゅいません!!私は馬鹿女でしゅ！」
「認めるのかい？この変態痴女？こりゃお仕置きが必要だねぇ。」
そして、鞭をとりだし、少女の尻に…バシン！と叩く。
「ヒャア!!はぁい！私は変態痴女でぇす！だからお仕置きしてぇぇぇ!!ファァァァァァ!!!」
ｉｎ純粋な少女の家
「どどどうして!?パンツが濡れてる…私、もしかしたらお漏らししたの!?嫌だよぉ～もう小学校６年生なのに…グスン…」